

絵を描くひと に



なりたかった

すずはら なずな

はじめまして



はじめまして、すずはらです。

描きためて あちこちで公開した絵を
日常のあれこれや 個人的な思い出話とともに
まとめていきます。



なんにも ない 空間を
そんな目して見るときがある。

きっと、何か いるんだね。



ひろいところまで 行けばいいのに

そんなところで 凧 揚げて。

ひっかかっちゃった 凧。

高く 高く 舞いあがれなかった 凧。

それは なんだか 日頃の じぶんみたいで。



遠い 遠い 記憶の中の
まだ 目も開かない 子どものころの
草のにおいと 風の香り

コンクリートのベランダで
猫の見る夢 ひとつ 見つけた

.....

うちの猫は 室内飼いです。
いつも、窓からじいっと 外を眺め
しっぽをゆさゆさゆすったり、突然ぷわーっとふくらましたり
急に移動して 別の窓へ走ったりしています。

小さい頃から、大変無口な猫だったのですが、最近
「ごはんー」に続き
「窓開けてくれー」
「ドア開けてくれー」

と、大きな声を出すようになりました（もちろん猫語です）

遅ればせながら モノゴコロついたような。

誰かが外に出ると隙をねらって 飛び出して行くことも増えました。

けれどそういう時も、少しして 様子を見たら
隣との間の塀の上で 情けない顔のまま、固まっていたりします。

どうも外の楽しみ方がいまひとつ解らないようです。

なんだか不憫。



ほんの数年前のことでも何だかずいぶん昔のような気がする。

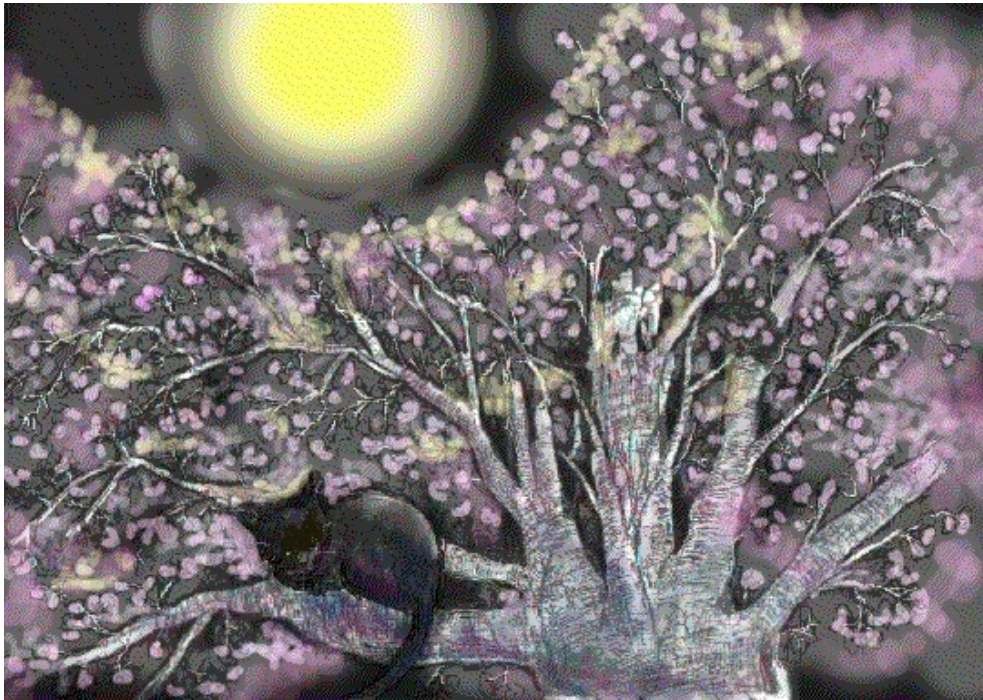
5年ほど前になるだろうか、
おうちを作って 壁紙に凝り 入口を毎月 新しい絵で飾って
借りてきた掲示板を取り付け そこに絵日記を描いて 友達を呼んだ。

．．．．．HPの話である。

消し方さえ解らない自分のHP。
久しぶりに見に行くと 以前なかった広告が入ったため、レイアウトが崩れたまま
廃屋と化していた。

広い広いネットの海に漂っている壊れた船のようでもある。

黒いラブラドルを飼っていた詩を書くあのひと。
今はどうしておられるだろう。

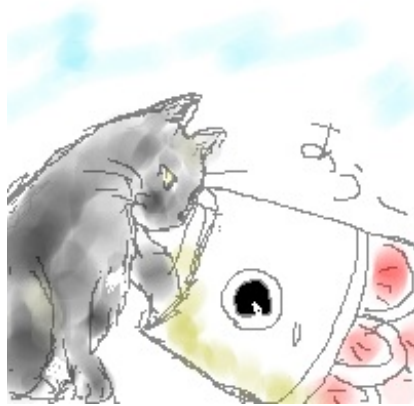


あっという間に桜の季節も終わってしまいました。
今年は寒かったり暑かったり 毎日クルクル変化する。
雨もハンパじゃなかったし。

片づけたセーターをまた引っ張り出した。

この春一度だけのお花見の日は
冷たい風が吹いていて 震えるほどでした。
クーラーボックスに 発泡酒とか冷たい紅茶とか
張り切って用意したのに。

熱いコーヒーで手を温めながら 肩寄せ合い
せっかくだから・・・と ベンチでおしゃべりしたけれど
肝心の桜はほとんど目に入りませんでした。
残念。



気がついたら5月だった。

向いの家のベランダに こいのぼりが揺れている。

男の子は そろそろ4年生くらいだろうか。

よその子の育つのは何だか早く感じる。

この間 生まれたような気がするのにね。

うちにも こいのぼりはあった。

あった・・・のか ある、のか定かではない。

もしかしたら まだ どこか押入れの奥とか ベッドの下にあるかもしれない。

こいのぼりは 息子が生まれた年 ダンナの実家からの贈り物で
男きょうだいのいない私にとって 初めてしげしげと間近で見るシロモノだ。

ふーん。

ふーん。

サカナだ。

鯉だ。

狭いベランダに取り付けるのか。めんどくせー。

感慨というのが これといってない。

ベランダは狭い上に 横にすぐ壁があって 隣の家の方が前に出ている作りのせいで
風というものが 全くといっていいくらい 通らない。

なので、取り付けるだけ取り付けたもののこのデッカイお魚は

でろりんと たれさがったまま どうにもならない。

それでもやっぱり 節句とか季節の行事とかいうものは
やってやることに意義を感じていたので
毎年 その でろりんと垂れさがらすだけのために 出したりしまったりを繰り返してきた。

小学校も高学年になって 今年はまだ 忘れたふりして出すのサボろうと決めた。
それ以来 無理な努力は辞めている。

それでも 楽しんで出した思い出というものもあって
子どもたちに 「着る」ことを許可したら
喜々として 鯉にもぐりこんだり 被ったり。
ちょっと 笑えるファッションショー状態にも なった。

まあ、そんな時間が持てたことだけでも こいのぼり、
存在価値はあったんじゃないかなと思うのだ。



もう いらないだろう・・・と思って準備しなかったその年

小さい子のいる家々の、たくさんの「願い」を揺らす笹の飾られた玄関を
何だか物足りなそうな顔して横目で眺める わが家の子ども達。

ああ・・・

まだ、そういう行事って ひそかに好きだったりするんだ、と
勝手に納得したハハは 慌てて 笹を探しに行った。

その辺に、勝手に切って良い笹を見つけることができず
スーパーの野菜売場の脇に 青いバケツに立てられた
最後の一本の もう葉の乾きかけた笹を見つけ
100円出して 買って帰った。

せっかく買って帰ったのに、子供たちは、飾り付けを面倒がり
短冊にお願いを書くのを 恥ずかしがった。

結局、無理やり手伝わせ、輪つなぎや星の切り紙をつるし
ハハがいくつかの短冊を書いた。

「家族がずっと健康で 仲良くできますように」
毎年 同じ文句だよ
口だけどんどん達者になっていく 子どもたちが言う。

来年はもう 笹なんか買うもんか、と思いながら、それでも
心を書く短冊は、ずっと同じなんだよ、と
ハハはそうも、思うのだ。



ちゃんと 切手を貼ったっけ・・・

もしかして 知らない内に送料値上げされてて
相手に不足分払わせたかも・・・とか

もしかして 住所 違ってたのか？
とか

着いたよーの リアクションがないと
心配で。

リアルのお手紙は そんな様々な迷いやら 心配やら を
引き起こしながら

それでも なんだか ちょっと 楽しい時間を持てて

何より そのひとのために 絵を描こうと思って
ウンウン悩んだ時間と にやにやしながら 色塗った時間が

送るものでありながら
贈られた宝物のような時間で

「ありがとう」と コメント入れて 送らせてもらったのです。

ここを見ってくれるひとたちにも 秋のご挨拶です。



色を付けました。

秋のたより (完成)

完成。黒猫と魔女に似合う 「月夜」 になりました。





大した数ではないけれど、いくつか手紙を貰ったことがある。
携帯電話とかメールがある今だったら、どうだろうと思うけど
手紙の時代だったからこそ貰えたのかもしれない。

来るのはいわゆる「ラブレター」というヤツではなく
もちろん付き合っほしいとか、好きです、とかいうものでも全くなく

日記の写しなんだけど・・・とか
文集に載った感想文についての「感想」とか
そんなものばかりだった。

内面を誰かに知ってもらいたい
こう見えても、案外繊細なんだぞ・・・みたいなアピールを
相手はしてくるのだが

受け止める度量もなく

心寄せる優しさも 実はそんなになかったりする。

こっちは全然、にんげん出来ていないのだ。

漢字の誤記（誤変換ではない）だけが
やたらと記憶に残る。（なんてイヤなヤツだ）

「浪人」・・・を一文字間違えたまま、書き続けたあのこ。

「オオカミ」には全然 ならなかったね。



ローファーに憧れた。

中学時代は三つ折りソックスに白い運動靴が規則だった。

ラインの入ったソックスが流行り
学校ではそれを密かに折り曲げて履き
放課後はのばして ソックタッチで留めた。

スカートを少しだけ 長くして
ジャージは裾を何回か折って 短くして履いた。

格好いい、と信じていた「外した方」も、今思えば たいがいだ。

高校は服装にかなり自由があった。
ひとつボタンを外しても ネクタイを緩めても 柄物のシャツを着ても
「違反」ではなかった。

たまにジーンズを穿いたり、基準服のスカートの上にチェックのシャツを着たけれど
いつも どんな靴下を履き、どんな靴を選んで学校に通ったのか、
実はよく覚えていない。

時々見る夢はいまだに 予習をしていないところが当たりそうで
どうしよう どうしようと焦る 授業中の自分で

その状態から抜け出すべく 私は頭を必死に整理する。

— 「今の私」は学生ではないはずだ。

その後の自分の記憶を探り、様々な理由を並べ、そうして 夢の中で納得するのだ。

『・・・これ、夢だよ』

時にはランドセルを忘れ、また次は 寝巻き姿で鉄棒をし
そんな夢から醒めた時 思うのは
鏡さえ見なければ 内面全然進歩のない 自分のこと。

子どもの時 「大人」ってもっと「大人」だったのになあ。

「困ること」「焦ること」の基本は自分にとって 相変わらず
学校での「忘れ物」なのかもしれない。



机の上に
かえる と おかき

かえるは みどりのフェルトで
にこにこ顔の 手作りマスコットだ。
おかきは 小袋入りでみっつ。

何？
と、聞く。

今日は 近くの団地から
おばあさんを一人
ごくごく近くのお店まで 連れて行って
連れて帰って

団地の中へ コインで開ける鎖のゲートを抜け
お住まいの棟の入り口まで。

車を降りてコインを入れたり 戻ったり
手間だけど その間 メーターも上がらず
お店もごくごく 近場。

そんな仕事。

「運転手さん、この車には これ ついてないねえ」
おばあさんは にこにこがえるのマスコットを かれに手渡し
これも、とおかきを差し出したんだ。

同じ会社のタクシーに いくつも
にこにこがえるは 揺れている。

小さな仕事だけど
そんな仕事を積み重ね

にこにこがえるで 無事帰っておいで。

そんな はなし



サワサワ ザワワ・・・というのは 何？

ぼんやり 明るくなって暗くなって

明るくなって暗くなって

ぼく うとうと 眠ってたんだよ。

そしたらいつのまにか 大きくて あったかくて優しい 場所がなくなっていた。

くちゅ くちゅ くちゅ

押し合い へし合い だんごになって 飲んだ

あの おいしくって しあわせなもの

そばに ない。

サワサワ ザワワ

音が 大きくなると

ちょっと こわくて

おんなじ大きさの あったかいぬくもりを

探し合って ひっついて また 眠った。

寒くは ないけど ぷるぷる ふるえた。

ミイミイ チイチイ

みんなで 呼んだ。

どこに いるの？

オカアサン。

明るくなって 暗くなって
気がついたら
そばに もう だれも いなかった。
サワサワ ザワワ 音だけがした。
あなた だれ？
ザワザワ言わないで こわいから。

私は 風。
サワサワというのは 草の葉さ。
大丈夫。風も 草も おまえさんを いじめない。
こわいのは もっと もっと 別のもの。

色んな ぬくもりが 通り過ぎた。
抱き上げられ ほおずりされ
下ろされた。
しっぽを つままれ 足をひっぱられ
なでまわされた。

おなか すいた。
いいにおいのもの 誰かがくれたけど
飲み方が わからなかった。
チュウ チュウできる あのやさしいぬくもりなら
おなかは いっぱいに 満たされるのに。

チクンとした。
キミは 誰？

オイラは 虫。
大きくなったら ネコは オイラを 追いかける。
気をつけな。
上から カラスがねらってる。
アンタがしっかり 育つまでは
鳥の方が だんぜん 強い。
気をつけな。
急降下してきたら オダブツさ。

ふわりと また 抱き上げられた。
そのまま 静かに なでられた。

オカアサンの ザラザラの舌の方が 気持ちいいけど
なんだか 安心できる あたたかさがあった。

オマエの幸運 祈ってるぜ。
虫が言った。
幸せにおなりね。
草たちの コーラスが聞こえた。

風があたらない物の中 ゆっくり ゆっくり下ろされた。
ユラリ ユラリ カタ カタン
ここは どこ？
ユラリ ユラリ カタ カタン
ボク どこに 行くの？

風の音が 遠い。

「ただいま。」
「ねえ、ママ ほら」
「何？何なの？カバンの中？」

声がして、また別の声がして
やわらかい さっきの手が 明るいところに 連れ出した。
幸せにおなり、幸せにおなりよ。
風が ささやいた。

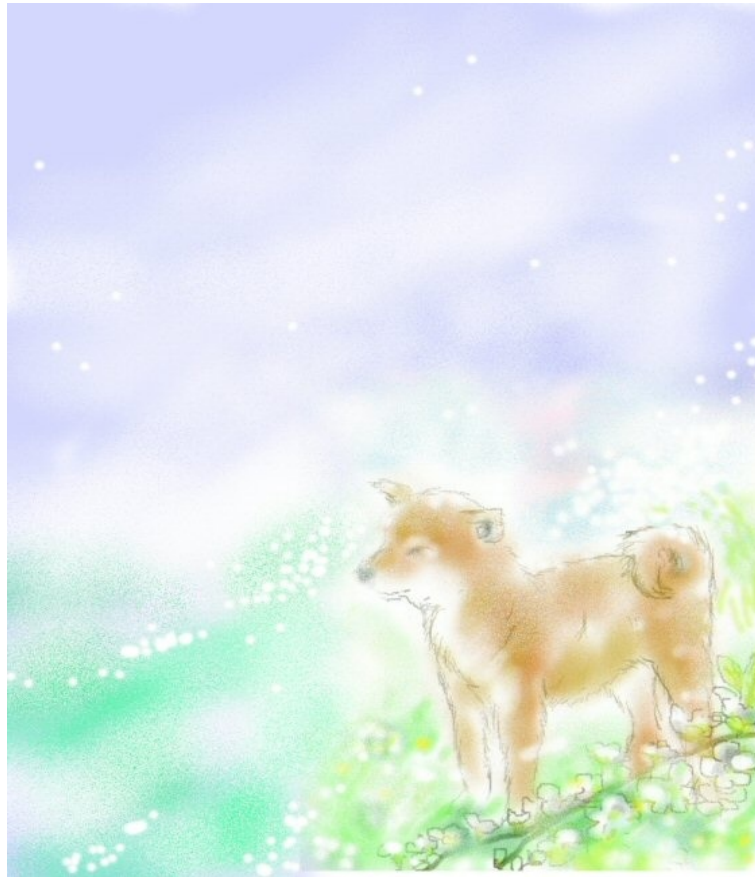
やわらかい手
安心になる この におい。

明るくなって
明るくなって
何でも見えるようになったら
この手の上を ちゃんと 見上げて

いっぱい いっぱい 言おう。

ありがとう。

だいすき。



うめ

ちらり

散歩する犬 草をはむはむ幸せ。

いぬの しあわせ。

菜の花きいろ。いちごの花 白。

左の塀から 雪やなぎ。沈丁花 。 坂道降りる。

悲しい春も うれしい春も さみしい春も 花は咲く。

そして 桜 。

もともとは 犬が好きでした。

うちだけでなく、近所にも犬を飼っている家が多くて
何の遠慮もない子どもの頃は
全部の家の門や塀の近くまで行き
首や鼻先を出してくる犬を 好きなだけ触ってから 家に帰りました。

空き地が多かったし 今ほどマナーに厳しくなかった昔は
草地で思いっきり走って遊んで・・・用を足し（犬がです。もちろん）
夕焼け空を並んで眺めたものでした。

水で薄めたおつゆかけごはん。おかずの残り。
はぐはぐ食べてた うちの犬は
栄養バランスきっちり考えた今のドッグフードを食べる犬たちに比べて
幸せだったのかな？

フィラリアでさよならになるまでの 4年ほどの付き合いだったけれど
雑種で何の芸もなく しつけも全くできてない犬だったけど

私には今でも最高の犬です。

最後の夜になったあの日
早く寝なさい、という母に対し
今日はずっと一緒にいるんだ、離れないんだ・・・と言えず
聞きわけ良く寝てしまったこと。

（普段は室内飼いではなかったのですが
その時だけは 玄関の中に入れてもらい 毛布にくるまっていた）

そんな時くらい 我を通す子でありたかったな。

いつも思い出すたび 過去の自分のことながら とても残念に思います。



3歳児の 不器用な手では 全然 すくえなかった ヨーヨー。
一個あげるよ、とおじさんに言われ
じっくり選んだ 黒地にカラフルなラインと水玉のそのヨーヨーは
帰り道 娘が振り回すと あっけなく割れた。
その後の 気まずすぎる沈黙。

もう これで終わりだからね、と しぶしぶ渡した500円玉。
「落としちゃった」と がっかり顔で すぐ戻って来た 息子。

大当たりだったと 嬉しそうに担いで帰って来た
有名キャラクター似の 大きなビニール人形は
数日 放置された後 徐々に 空気が抜けていった。

暗闇では魅力いっぱいだった 蛍光腕輪に 星付きカチューシャ。
ボタンを押すと 音を出しながらキラキラ光る おもちゃ。

すぐに壊れた 水鉄砲。

食べきれなかった綿菓子。

朝まで生きなかった 金魚。

数え上げれば「残念」と「がっかり」の記憶だらけなのに
それでも どうして お祭りは
相変わらず 楽しみなんだろう。

お祭りに向かう 浴衣の人たち見ると
なんとはなしに わくわくするのは なぜだろう。

今では 子どもたちはそれぞれ 友達と約束して出かけるようになった。
遠くで聞こえる太鼓の音を聞きながら
思い出をつまみに ビールでも飲みましょうか。



Sくんが逝ったそうだ。

穏やかでやさしい名前、そのままのひとだった。
ばあちゃんがそんな名前付けたから こうなんだ
Sくんの姉である私の母は 時々愚痴った。

古い町の古い長屋。
傾いて 滑り落ちそうな二階の畳の間
遊びに行くといつも、Sくんはそこで 静かに笑っていた。

大勢の兄弟の、歳の離れた末っ子。
甘やかしすぎた、と 母は言う。
優しすぎた、と母は言う。

気の強い母は 弟を苛める悪ガキを 箒振り回して追い立てた。

優しくかったSくん。

一度、映画に連れて行ってくれたことがあったっけね。
子ども向きの いい映画がなかったから
商店街そのまま歩いて、入った喫茶店

わくわくして頼んだ クリームソーダが運ばれてきた。
それは 知っている グリーンのソーダではなく
淡いバイオレットの飲み物だった。
なんだか変な味・・・私が言ったら
他のもの注文したらいいよ。
そう言って
メニュー差し出した。

目が線みたいになって 顔全体がしわくちゃになる笑顔
低い声で歌う うた。
意外にがっしりした身体つき。

しっかり者の奥さんと ひとの勧めで結婚し
子を望み けれど子に恵まれず
こころを病んで
ひっそりと生きたSくん
治療に入った病院で怪我をし そのまま逝った。

そんな人生が何だったのかと そう言いたげに苦い顔をした、
言葉少ない気丈な姉、わたしの母。

誰の人生がどんな意味があるか
どんな価値があるか
そんなこと 誰が言えるだろう

せめて
長く過ごしたその病院で
Sくんが心安らかで日々過ごしていたことを
望まないではいけない
意識なくなるその日まで
ああ、いい天気だなあとか
ご飯おいしかったなあとか
そんなことを考えて 暮らしていてくれたらと
思わないではいけない。

Sくん
クリームソーダの代わりにミックスジュース
嬉しかったよ。

美味しかったよ。

忘れないよ。

ありがとう。

絵を描くひとになりたかった

<http://p.booklog.jp/book/26457>

著者：すずはら なずな

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nazunasuzuhara/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26457>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26457>